allcinema

ピグマリオン（1938）

PYGMALION

メディア 映画
ジャンル ドラマ
製作国 イギリス
色彩 B&W
時間 96分
公開情報 劇場未公開・ビデオ発売

【解説】

後にミュージカル「マイ・フェア・レディ」となることで知られるＢ・ショウの戯曲の、彼自身による脚本での映画化で、監督は主演のハワードとＡ・アスキスが共同で当たった。彫刻が趣味の王ピグマリオンが自分の彫った人形ガラティアに恋をし、神に祈ってそれに魂を入れてもらうというギリシア神話の挿話の、ショウ一流の辛辣な翻案で、王は音声学者ヒギンズ教授に、人形は花売り娘イライザに、そして舞台は天界からロンドンに変わる。

ヒギンズは下層の訛を聞き分ける名人で、その晩もイライザの丸出しのコックニーに聞き惚れてはメモを取っていた。それがちょっとした騒ぎになって仲裁に入ったピカリング大佐こそ、彼が会いたく思っていた、やはり言語学の権威。早速、大佐と意気投合した教授は、自分ならこの貧相な下町娘を半年でレディに生まれ変わらせてみせるーーと軽口を叩く。これを真に受けたイライザは教授宅に強引に押しかけ、そこで猛特訓を受け、手始めに教授の母のお茶会に列席してみるが、言葉使いはよくなっても話の内容たるや……。すっかりしょげかえるイライザを叱咤した教授は、来たるトランシルヴァニア大使のレセプションに向けて、彼女を再度鍛え直し、今度は皇太子の最初のダンスの相手に選ばれる栄誉を拝するほどに完璧な淑女に磨き抜くのだったが……。

人を階級で隔てるのは所詮、言葉にすぎないーーと、英国社会の表層性をからかう、この物語の面白さはさすがにストレートに伝わってくる脚本の見事さ（オスカーを受賞）。映画的処理も無難で、特筆すべきは、後のリメイクのレックス・ハリソンよりも大分冷酷な感じが教授の柄に合うハワードの好演と、オードリーの美しさには較べるべくもないが典型的英国女性顔で、ことに変身前の演技が抜群のＷ・ヒラーのヒロインぶり。彼女は後々も性格女優として息の長い活躍を続けるが、映画デビューの本作では、なかなかの女性的魅力を大いに振り撒いている。

【クレジット】

監督	アンソニー・アスクィス	Anthony Asquith
	レスリー・ハワード	Leslie Howard
製作	ガブリエル・パスカル	Gabriel Pascal
原作	ジョージ・バーナード・ショウ	George Bernard Shaw
脚本	ジョージ・バーナード・ショウ	George Bernard Shaw
	Ｗ・Ｐ・リップスコーム	W.P. Lipscomb
	セシル・ルイス	
撮影	ハリー・ストラドリング	Harry Stradling Sr.
音楽	アルテュール・オネカー	
出演	レスリー・ハワード	Leslie Howard
	ウェンディ・ヒラー	Wendy Hiller
	マリー・ロー	Marie Lohr
	ウィルフリッド・ローソン	Wilfrid Lawson

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2026 Stingray. All Rights Reserved.